

# 西東三鬼の所謂「診療俳句」の文章心理学的解析

——平畑静塔の「診療俳句」との比較を中心として——

北野元生

1. 序言  
ア、「診療俳句」の定義づけ
2. イ、俳句は「文章心理学」的分析の対象となり得るか  
研究の目的と研究方法
3. ア、「診療俳句」の品詞分類  
イ、品詞の計測
4. 三鬼と静塔の分析結果の比較  
ア、体言（とくに名詞）について  
イ、用言、および用言／体言比について  
ウ、副詞について  
エ、声喩について  
オ、比喩（明喩）表現について
5. 西東三鬼と平畑静塔の「診療俳句」についての形態的検討  
ア、西東三鬼の俳句  
イ、平畑静塔の俳句
6. 考察  
ア、西東三鬼俳句の文体上の特徴  
イ、具体的感覚的俳句  
ウ、新興俳句から根源俳句へ  
エ、現代俳句に及ぼした西東三鬼の俳句
7. 結論にかえて

現代俳句の祖とも言われ、根源俳句の中核的な位置を占めることとなった西東三鬼は太平洋戦争前は「新興俳句」の旗手とまではやされていた。三鬼は俳人であるとともに、臨床に携わる歯科医師でもあった。三鬼の「診療俳句」七十一句を研究材料として取りあげ、三鬼と同世代の俳人で且つ精神科医師の平畑静塔の「診療俳句」百二十三句を比較参考に、その文章心理学的な分析（波多野完治）、とくに統計学的解析を試みた。三鬼の「診療俳句」では静塔のそれに比べて用言が多用され、さらに副詞が多く声喩表現が多いことがわかった。静塔が体言型の抽象的概念的な文体を好む傾向に対して、三鬼には具体的感覚的な用言型の文体を好むことが確かめられた。戦前の「新興俳句」の美学を超えて、戦後は生命主義の問題にまで突入し、いわゆる根源俳句の本質的部分を演じたと言われる三鬼にとっては、かかる用言型の言語の形態・文体が必要であったと考えられる。

## 1. 序言

西東三鬼（以下、三鬼と略称する）は俳人であるとともに、臨床に携わる歯科医師でもあった。筆者は彼の勤務していた病院での生活を通して詠んだ俳句を総称して「診療俳句」と分類してはどうかということを提案した<sup>①</sup>。そこで次の段階として、三鬼の詠んだ三千句近い俳句の中から「診療俳句」を研究材料として取りあげ、その文章心理学的な解析を行うこととした。三鬼は当初から言語感覚の抜き出た鬼才と評され、太平洋戦争前のいわゆる「新興俳句」の旗手とまではやされ、戦後は一転して根源俳句の中核的な位置を占め、現代俳句の祖とも言われる。これまでも三鬼俳句については、種々の解析が試みられていたが、文体学的な解析には乏しいくらいがあった。

そこで今回は、文章心理学的な分析をもとに三鬼俳句の文体の特徴を見出し、三鬼俳句の理解に供することができるのではとの作業仮説を立てて、三鬼の診療俳句の分析と検討を行った。

文章心理学とは波多野完治（以下、波多野と略称する）が昭和十年代より開発進展させた文体解析の方法論である<sup>②③</sup>。言葉は本来が抽象的な、あるいは概念的なものである。言葉は事物や世界なりをそのままあらわすことはでき

ない。どんな具体的な言葉でも外界の事情そのままを言い表しえない。言葉の性質上どうしてもそうならざるを得ないのであって、言葉は外界の事情をひとつひとつの要素にいったん分解して、これを再び統合し総合するという方法で、人と人の通信を可能にする機能なのである。従って、どうしても言葉自体が抽象的にならざるを得ない。

換言すれば、言葉は元来社会のもの、共通のものである。これを借りて自己独特の感情を表現することは、極めて困難なことである。しかし、我々はこのように抽象化された言葉を使って、具体的な外部または内部の環境や事情または事象を語らなければならない<sup>④</sup>。具体的なものは、ただ一つのもの、ただ一回きりのものである。ところが言葉は誰に対しても共通のものをしかその内容としていない。この普遍的なものを使って自己のだけの特殊な精神生活（感情）を周囲の人びとに語るべき技術を習得しなければならぬ。

この際、技術は二つの方向に向かう。一つは、環境の言語的叙述をできるだけ詳しく、具体的に感覚的に、要するに現実に行えるだけ近づけようとする努力である。第二の方向は環境をできるだけ図式的、概念的（観念的）に描いて、あとは読者の想像にまかすという方向である。この場合、具体的環境は如何に言葉を浪費しても完全には再現し

えないのであるから、含蓄を多くするなどして、一定以上の具体化の努力は放棄するのである。

波多野は前者による文章を具体的、且つ感覚的な文章と名付け、後者によるものを抽象的、且つ概念的（観念的）文章を名付けている。さらに彼は、「この二つの文章のどちらがよいかということは言えない」と言っている。もとは不完全な言葉を使って現実の環境の再現を図ろうとする技術なのであるから、技術が巧妙に使用されれば、どちらでも優れた表現になることに変わりはないからである。ここで、波多野の文章心理学は、あくまで解析を小説等の文芸作品を対象にするという下地に据えた論であり、学術論文の如き概念性・観念性の強い文章は取扱わないことへの了解が必要である。

以上のような波多野の論を前提に、三鬼の所謂「診療俳句」の分析にとりかかる。分析の目的は三鬼の俳句が先に述べた具体的・感覚的文体を好んで用いているか、あるいは抽象的概念的文体を好んでいるかどうかを明らかにすることである。そして、三鬼の文体的特徴が抽出できれば、その文体が三鬼の俳句の表現にとっていかなる文学的な意義付けができるかを考察する。

本研究の遂行に当たっては、三鬼とはほぼ同世代の俳人であり、且つ精神科医師の平畑静塔（以下、静塔と略称する）の

「診療俳句」を比較して参考に供することとした。

#### ア、「診療俳句」の定義づけ

三鬼および静塔のそれぞれの『全句集』<sup>(5, 6)</sup>から抜き出したいわゆる「診療俳句」を分析の対象にしたが、そもそも診療俳句の定義づけがまず必要である。このことについては、筆者の論文に詳しく書いておいたので、そちらを見ていただきたいが、「診療俳句」なる用語がそもそも一般に使用されているわけではなく、なおその概略を延べるとすれば、彼らが診療実地での体験や感慨等を俳句に詠んだものを「診療俳句」と分類するのである。当然、その分類の中に、彼らの臨床医家としての患者診療の実地、診療環境（病院、診療室、病室、医局、歯科技工室、病院のスタッフ等々）、診療環境とは多少離れていても、診療行為と直接関連するような病院への出勤帰宅に関連した諸事が含まれる。また、静塔は医学生への教育にも携わっていたので、学生の医学教育の実地研修等に関連したものはこの範疇に含めた。静塔の太平洋戦争前に詠んだ病院船に関する俳句は、三鬼らが詠んでいた戦争を想望した俳句と同じ規に属する想望俳句であると考えられるので、今回は「診療俳句」としては取り扱わなかった。

その結果、三鬼の「診療俳句」は七十一句、静塔のそれ

は百二十三句を数えた。彼らの「診療俳句」のすべては本論文の文末に別表一および二としてあげておいたので、それを参照してほしい。

### イ、俳句は文章心理学的分析の対象となり得るか

最後に、俳句は「文章心理学的」分析の対象となり得るかにについては、管見では、枝元一三の山口誓子の俳句についての文章心理学的分析論文の一篇<sup>⑦</sup>だけが渉猟され得たに過ぎないが、もともと波多野は文章心理学分析の対象を小説などの長文に應用して開発した分析法ではあるが、俳句などの短詩系の文芸作品を念頭に置いて、後に述べる体言型文体や用言型文体などを区分けた経緯もあり、俳句が文芸作品であり、文章心理学的分析の対象となりうるとして評価していた。従って、俳句や短歌についても「文章心理学的」分析の対象となりうるとして差し支えないものと考ええる。

## 2. 本研究の目的と方法

まず、分析の目的は三鬼および対象として上げた静塔の俳句が先に述べた具体的感覚的文体を好んで用いているか、あるいは抽象的概念的文体を好んでいるかどうかを明らかにすることである。波多野は抽象的概念的文体と具体的感

覚的文体とは以下のような項目に注目して鑑別すべきであると述べている。それらは、「①使用する名詞が具体的なものか、抽象的なものか。②動詞や形容詞のような用言が多いかどうか。③副詞が多く使われているかどうか。④文が長い短い。⑤「要するに」とか「結局」とか、事情をひとまとめにした句が出てくるかどうか。⑥話体が直接話体であるか、間接話体であるか。⑦声喩が多いかどうか。⑧比喩が多いかどうか。」が含まれる。

本研究は三鬼および静塔の診療俳句を名詞あるいは代名詞などの体言と動詞形容詞などの用言を中心に、波多野、さらには枝元一三の開発した方法を参考に数値的に分析し検討を加えることとした。

## 3. 分析

俳句の分析にあたって、俳句の特徴を少し述べてみたい。俳句は五・七・五の定型をもつて基本とする。勿論、定型にとらわれず自由に律動を操って作る「自由律俳句」があるが、三鬼も静塔も定型俳句を旨としていたようである。従って、今回は自由律俳句については考えない。加えて今回は、同様の理由で両者の俳句の文章の長さを比較することはない。あるいは、俳句の切れを中心に分析を進めるとすれば、切れの入るところまでの一まとめの文あるいは句

としてそれらを計測することは可能であるが、切れを読み取るには相当の訓練も必要であり、また読む人それぞれの俳句観や切れ観とでも言う厄介な代物が介在し、大多数の人が納得できるようなすっきりとした計測値は出せない。従って今回は文あるいは文章の長さは検討の対象にしない。次に、会話体については、今回の分析の対象とする「診療俳句」には会話体が用いられることは皆無である。従って、この論文では考慮しない。また、比喩は明喩についてだけを謂い、暗喩については、読者の主観にまかされることが多いので、ここでは分析の対象としない。

次に、俳句一般に使用されている季語については、三鬼の独特の季語観により、季語を使わない俳句を多く詠んでいる。また、静塔も戦前には無季俳句を詠んでいる。そのような理由で、季語の有無やその性質をもって両者を比較することが、本解析を行うに当たって、正当であるかどうか疑問もある。そこで、今回は季語についての分析は行わないこととした。季語が使われていても、一般の普通の語あるいは語句として取り扱う。むしろ、季語についてを云々する必要のある時はこれを取りあげる。

#### ア、「診療俳句」の品詞分類

日本語では、品詞の転成が多く、本来動詞であるものが

名詞的に使用されたり、形容詞的のものが副詞的に使用されること等がひんばんにされている。従って、単語の定義が確定していない部分が多い。日本語の品詞分類は、以上のような理由で極めて困難で、正確な品詞分類は不可能であると言っても言い過ぎではない。そこで一応、小学館の『大辞泉』を基本に置き、『広辞苑』『広辞林』や種々の『古語辞典』『漢和辞典』等を参考にして品詞分類を行うこととした。ただ、筆者一人の好悪で、品詞を決めつけることのないように、歌人の内藤三郎氏（「潮音」所属）のご協力を仰いで、二人の合議で決めたものもある。世に謂うダブルチェック機能を働かせたことになる。しかし、最終のところ、田中みどり著『日本語のなりたち―歴史と構造<sup>8)</sup>』を参考にして、筆者なりの品詞分類を行っている。

品詞の種類は、体言（一般名詞、固有名詞、代名詞、数詞等を含む）、助詞、動詞、助動詞、形容詞、形容動詞、副詞、助詞、その他とした。この、あのやそのは語源的にはこれ（代名詞）の（格助詞）、あれ（代名詞）の（格助詞）、それ（代名詞）の（格助詞）の約まったものであるとされているが、現在では一般に連体詞として取り扱われているので、代名詞および助詞としての取り扱いはやめて、その他に分類した。感嘆詞や接続詞等々もその他に分類した。いずれもその他に分類した語の数は多いとは言えない

ので、次項の統計処理に重要に係わってくることはない。

名詞は長い名詞ほど、種々の名詞が重畳して作られると考えられるから非常に取扱いが困難である。例えば、仮に「診療俳句」という語があげてみる。これを診療と俳句の二語に分解して、二語と数えるか、診療俳句と一語と数えるかは問題である。診療俳句なる語は筆者が最近診療と俳句の二語を合成した作成した語句であるから、まだ一般には膾炙され成熟をみた言語であるとは言えない。従って、この語は名詞二語であると数えるべきであろう。次に、「総合病院」はどうであろうか。総合と病院の二語であると考えるか、総合病院と一語にするかどうかである。この場合、総合病院と一般に使われてきた歴史を慮ると、この語の認知度は診療俳句などの新規に作成された語とは桁違いに大きいと考えられる。この語の由来と使用された経過等を考慮すれば、既に総合病院と言う単語としての独立性が確立していると考えても差し支えないものである。従って、この語は一語の名詞であるとして取り扱うこととした。その他の合成されて作られた名詞が数多くあったが、個々の名詞については以上のような考え方に準じて、取り扱うこととした。

動詞も同様に取扱いを慎重にするべきであろうと考える。飛び降りるおよび飛び込むなどはそれぞれが飛ぶと降りる、

および飛ぶと込むの合成動詞である。合成動詞については二語（あるいは三語）の動詞であると数えた。ぶら下がるはぶら（接頭語↓その他）下がる（動詞）と、分けて数えた。助詞で接合した合成動詞も多いが、例えば飛んでみるは飛んでーみると分解できるので、動詞二語、助動詞一語と数えた。

#### イ、品詞の計測

まず、三鬼の「診療俳句」七十一句、および静塔の同じ百二十三句のすべてについてを品詞に分類した。三鬼の七十一句中に用いられた体言は二百五十二語、用言は動詞百十三語、形容詞二十語、形容動詞三語の計百三十六語が使用されている。体言（ほとんどが一般名詞であった）は平均値として一句につき、3.5493語（標準偏差《以下、SDと記載》は0.8069）であった。同様に、動詞は一句平均1.5915語（SD・1.0082）、形容詞は平均0.2817語（SD・0.4835）、形容動詞は平均0.0423語（SD・0.2026）、用言としては平均1.9155語（SD・0.8904）であった。用言と体言のほかは、助動詞は十三語で平均0.1831語（SD・0.4570）、副詞は七語で平均0.0845語（SD・0.2781）、助詞は百五十五語で、平均2.1831（SD・0.8994）、その他は三語で平均0.0423語（SD・0.2639）であった。



一方、静塔の「診療俳句」についても品詞分類を行った。静塔の百二十三句の診療俳句で使用された体言は四百三十一語、用言は動詞百六十五語、形容詞二十語、形容動詞十語の計百九十五語であった。体言はほとんどが一般名詞が使用されているが、極めて少数の大文字（焼き）のような固有名詞が使われていた。一句当たりの平均値は、名詞は3.5041語（SD・0.7722）であった。用言については動詞は一句につき1.3415語（SD・0.7770）、形容詞は0.1626語（SD・0.4123）、形容動詞は0.0813語（SD・0.2744）であり、用言としては平均で1.5845語（SD・0.7347）であった。さらに、助動詞は三十四語で平均0.2764語（SD・0.4842）、副詞は五語で平均0.0407（SD・0.1975）、助詞は二百九十一語で平均2.3659（SD・1.0022）、その他は一句で平均0.0081語（SD・0.0902）であった。

#### 4. 三鬼と静塔の分析結果の比較

三鬼と静塔の「診療俳句」の品詞分類の結果を基に、次に両者を比較し検討する。

##### ア、体言（とくに名詞）について

波多野は具体的感覚的文章はより具体的な名詞が用いられ、反対に抽象的概念的な文章にはより抽象的な色調の濃

い名詞が使われているという。さらに、枝元一三によれば、一つの俳句から体言（名詞）を取り出し、その句を構成する歌材（句材）と考えて、その体言（名詞）を取り出してみることに意味があるとも言っている。

三鬼と静塔の所謂「診療俳句」で使用した名詞についてを概観してみよう。「診療俳句」と限定して選出した俳句である関係上、病院や病名あるいは病院のスタッフが素材となるのは当然として、なおかつ用いられた名詞は俳句の素材としての存在価値があることも当然として、しかしそれでもなおそれぞれ特徴が認められる。まず三鬼の俳句七十一句中用いられた名詞を頻度の高い順序に並べると、病者（九回、この値は一句当たり0.13回の割合である）、歯（七回）、口（七回）、血（七回）、手（七回）、病院（六回）、医師（五回）、冬（五回）、枯野（五回）、以下、患者、病舎、屋上、女医、桜、秋が四回ずつであった。一方、静塔の俳句百二十三句では、狂院（十四回、この値は一句につき0.11回にあたる）、癪（十四回）、精神科（十二回）、医師（十回）、狂人（八回）、狂者（七回）、大文字（七回）、聖樹（七回）、以下、踊、雪、夜、手が六回ずつである。二人の扱う診療内容は異なり、句数も違う。また彼らの個性による句柄に差異があるのが当然で、素材として選んだ言葉に違いがある。しかし、それぞれが病院や医師、

患者、診療内容にかかわる事項が上位を占めているのは共通している。しかし、三鬼の使用した名詞そのものは比較的字数（音数）の短い、あまり特殊でない平易な具体的事象を表す言葉が多いのに対し、静塔のそれらはやや抽象的ないしは概念的であり、あまり平易でない名詞が多いようである。それにもまして、静塔の使用した名詞は字数と音数の多い名詞が多いことである。例えば、老狂女、狂者守、狂人守、精神科、精神鑑定医、老教授、患者会、顕微鏡、尿検査、驅梅毒、検徴院、癩童子、癩家族、ハンセン氏病などの大型の名詞が目立って多いことに気付かされる。

また、大文字（大文字焼き）、八重桜、帰り花などの大型の季語を含めるとも多い。限られた十七音から成り立っている俳句の中で占める名詞の姿が大きくなるといふことである。仮りに五音を超すこれらの名詞を巨大名詞と名付けると、静塔句にはこの巨大名詞が五十四語使われている。これは一句につき平均 0.4390語 (SD・0.5432) であった。それに対して、三鬼俳句の中では、大枯野と母子病棟などが巨大名詞に相当するのであるが、全部で十五語が使用されているに過ぎず、一句につき平均 0.2254語 (SD・0.4502) である。両者を統計学的に検索すると、Student Tテストで  $p=0.0015$  と明確に有意差が認められた。

三鬼と静塔との1句あたりの体言数は三鬼の3.52、静塔が3.50で、Student Tテストでは  $p=0.6395$  で両者の間に有意の差はない。既に述べたように静塔の使用する名詞に巨大名詞が有意差をもつて多く使用される傾向があることを鑑みると、三鬼の診療俳句の名詞数わずかに多いのはそのことを反映していると思われる。

#### イ、用言、および用言／体言比について

一方、動詞については、三鬼は一句あたり1.54で静塔の1.34に比して明らかに大きいと言えよう。統計学的にもStudent Tテストで  $p=0.0738$  で有意な傾向があるとの結果を得た。形容詞にも同様に  $p=0.0707$  で有意な傾向があった。形容動詞は  $p=0.2592$  で有意差はなかったが、動詞＋形容詞＋形容動詞を加え合わせた用言の総数については、三鬼の一句あたりの用言数は1.92、静塔は1.56でStudent Tテストで  $p=0.0059$  と極めて明瞭に有意差があるとの結果が得られた。

次に、三鬼の体言二百五十二語、用言百三十六語と静塔の体言四百三十一語と用言百九十五語との相關関係の間に用言／体言比は三鬼は136／252＝0.5396、静塔は195／431＝0.452と明らかに三鬼の方が大きい値を示した。しかし、カイ二乗検定では両者間に有意の差はみられなかった。



波多野は谷崎潤一郎と志賀直哉二人の小説の文章を比較分析して、谷崎は用言型、志賀は体言型であると分類した。これを倣って、今回得られた三鬼と静塔の数値を鑑みるに、三鬼の「診療俳句」を静塔のそれに比較すると三鬼はより用言型俳人であると言えそうであった。これに反して静塔は三鬼に比較してより非用言型俳人、換言すればより体言型俳人であると言える。

#### ウ、副詞について

先に述べたように、副詞の使用頻度は三鬼は七語、静塔五語であったが、一句平均は三鬼が0.0986語 (SD・0.3002) とい、静塔は0.0407語 (SD・0.1975) といった。三鬼は静塔の2.4倍強の使用頻度を示していることになる。統計学的検索（カイ二乗検定）の結果、三鬼と静塔の両者の間に  $p=0.1066$  で有意の傾向があると言える。

波多野によれば副詞は形容詞に添えられるから、形容詞を多用する文あるいは文章には、副詞は多くなる傾向があると言う。このことも含め、次の「声喩」の項で詳しく解析する。

#### エ、声喩について

外界の音（聴覚）を言葉で再現したり、視覚嗅覚等の感

覚器で得た感覚や感情を音で表現することを声喩的表現という。一般に使われている擬声語および擬態語、あるいはフランス語のオノマトペに近い用語である。例えば、川の水がさらさら（と）流れる、匂いがぶんぶん（と）する、目の前がぼつ（と）明るくなる、木が燃える音がぱちぱち（と）聞こえる、柱がぐらぐら（と）揺れるなど無数に考えられるであろう。括弧内に括った（と）は助詞であるが、助詞を添えて使うことも多い。これらの声喩表現は主に副詞として用いる。具体的感覚的な文章を好む人はこの声喩表現を使うことが多いと波多野は言っている。

三鬼の副詞を使った七句をすべてあげてみると、

「いつまでも冬母子病棟の硝子鳴り」

「人を焼く薪どさどさ地に落す」

「わらわらと日暮れの病者桜満つ」

「共に寒き狂者非狂者手をつなぐ」

「病孤児の輪がぐるぐると天高し」

「いつまでも何を指さす病者春夕べ」

「夏はじまる原色べたと病者の画」

静塔のそれら五句をあげてみると、

「大文字視たる狂者を又鎖す」

「盆の夜や踊りて癪が地にぎっしり」

「我を遂に癪の踊の輪に投ず」

「ただ立てり狂ひて立てりセルを包む」

「正氣にて狂女よつびてでも踊る」

以上の諸句に見るように、三鬼のどきどき、わらわら、ぐるぐる、べたは明らかに声喩表現であることが分かる。

静塔のぎつしりは一定の状況を音で表現しようとしたと考えられないこともないので、声喩と取ってもよい。いずれにしても、三鬼の句には明らかに声喩表現が多いことがわかる。ちなみに両者の声喩表現についてのカイ二乗検定では、 $p=0.1180$ と有意の傾向があることがわかった。彼の代表句の一つである「水枕ガバリと寒い海がある」のガバリは声喩表現であるのは明らかである。一方、三鬼のいつまでや静塔のまた、遂に、ただはかなり抽象的（概念的）な色合いの濃い副詞である。静塔は用いる副詞は全体に少ないうえに、かかる抽象的な副詞を多用することは注目すべきである。

前項で上げて置いた、波多野の論によれば、形容詞に添えて副詞を使うため形容詞の多い文章には副詞も多くなると言っているが、揚げた三鬼の七句うち、一句のみ「病孤児の輪がぐるぐると天高し」に形容詞の高しが使われているのみであった。加えて、ぐるぐるは高しに添えられたものではないことは明らかである。子供たちの輪がぐるぐる回るの回るを省略したぐるぐるである。これに季語の天高

しを配し、秋の病院風景を表現しており、且つ三鬼の心象を述べていると考えられる。さらに、静塔の五句に形容詞は使われていない。従って、波多野の論はここでは成り立たないことになる。しかし、そうは言うものの、三鬼の診療俳句では形容詞の使用頻度も高いことから、形容詞と副詞の双方が三鬼により好まれて用いられたということは言える。

オ、比喩（明喩）表現について

三鬼の「診療俳句」七十一句中には明確に明喩表現であると思われる表現を用いた句は見当たらなかった。しかし、「大枯野壁なす前に歯をうがつ」では大枯野が壁となつて眼前に広がっている様が見て取れる。これは明喩の一種であると言える。静塔の診療俳句百二十三句の中に「狂院の蟬の樹下わが塚めきて」の塚めきては形の上からは明喩的表現であるが、このような表現を取るものはこれ一句のみである。

いずれにしても明喩表現に関しては、三鬼にも静塔にも使用頻度が極めて小さいことなどから、これ以上、両者を比較して論ずることはしない。

## 5. 三鬼と静塔の「診療俳句」についての形態的検討

波多野の挙げた分析項目に沿って、数值的に解析を行い、得られた結論としては、波多野の謂いに従えば、三鬼は用言型文体と副詞を多用し、具体的に感覚的な文体を好むということである。一方、静塔は体言型文体を能くし、抽象的で概念的（観念的）な俳句を好むということになる。果たして、この結論は正しいだろうか。以下は、両者それぞれの俳句いくつかを例に挙げて検討する。

### ア、三鬼の俳句

三鬼の七十一句すべてを検討することが望ましいが、それはただ論を錯綜させるだけであるから、十句を例句として、かつ品詞に区別してあげてみる。

「悴みて貧しき人の義歯作る」

「枝鳴らす枯木の家に帰れば寝る」

「寒き手や人の歯を抜き字を書かず」

「鰻頭を夜霧がぬらす孤児の通夜」

「屋上にはばたきはばたき医師貧し」

「病者の手窓より出でて春日受く」

「病廊を蜜柑駆けくる孤児駆け来る」

「病孤児の輪がぐるぐると天高く」

「病室の床に光りて蟻動く」

「嬰兒の死白衣を脱ぎて女医帰る」

以上は太平洋戦争に日本が敗戦したのち、三鬼が大阪女子医科大学附属香里病院に歯科部長として勤務している期間に詠まれたものである。当時、まだ敗戦の混乱から立ち直っていない世情を反映して、戦災孤児や貧窮者が全国に溢れていた時代である。保健衛生思想も未だ普及してなく、健康保険などの医療や福祉などの社会保障制度もあまり整ってはいなかった。そこで、公立病院や医科大学付属病院などは、孤児や貧窮者など、今に言う生活弱者の診療を引き受けていたが、三鬼が勤務していた病院はさしづめそのような病院であった。ここにあげた俳句を読んでも、その頃の病院での生活弱者の様子がよくわかる。そして医師や看護婦らを含めた医療供給側も貧しく過重な労働を強いられていたに違いないのである。

それはともかく、これらを総攬するに、一句中に動詞と形容詞が多いことが分かる。例えば、一句目は悴み、作るが動詞、貧しきが形容詞であり、一句の中に三語の用言が用いられている。二句目では、鳴ら、帰れ、寝ると動詞が三語使われている。帰れば寝ると二語の動詞を疊語的に仕立ててもいる。三句めの俳句および七句めの俳句は三鬼の

俳句としては珍しく用言が少ない。七句めは形容詞の「高し」が使われているのみである。ぐるぐるは副詞であるが、この俳句のことは既述した。その他、あげられた十句のすべてが用言止めの俳句である。

#### イ、静塔の俳句

次に静塔の百二十三句の診療俳句のなかから十句をあげる。

「狂院に身は宿直にて大文字」

「雪は玻璃麻葉ひそかに身に注せば」

「狂院の軍歌へ看護兵還る」

「我を遂に癪の踊の輪に投ず」

「踊りつつ癪尺寸に人臭し」

「八重桜狂人館より唾飛んで」

「狂ひの寝まつ毛合わすや青葉木菟」

「狂ひても母乳は白し蜂光る」

「雛の間に押しかけ精神鑑定医」

「ハンセン氏病の島より年賀来し」

以上の俳句のうち、冒頭の三句は静塔が京都帝国大学医学部を卒業して二年ほどのちの京大俳句時代作品である。四句目から八句目は戦後の天狼時代（一九四七年～一九五三年）の作品。最後の二句は静塔比較的晩年の句である。

これら十句を一見して、硬い漢字語（ほとんどが名詞）が多いのが注目される。既述したように、大文字、看護兵、八重桜、青葉木菟、精神鑑定医、ハンセン氏病と巨大名詞が多い。また大文字やハンセン氏病の固有名詞がある。

三鬼の例に合わせて品詞ごとに区切ってみると、一句目は体言（名詞四語）と助詞だけの句であり、用言が一語も使われていない。大文字は大文字焼きのことであろう。二句目では用言として形容動詞の「ひそかに」と動詞の「注せ」の二語が使われている。六句めと七句めでは用言としての動詞が一語ずつである。概して用言が少ないことがわかる。注目したいことは、俳句のモチーフとはあまり関連のない言葉（この場合は季語の八重桜や青葉木菟）を取り合わせる手法を用い、俳句そのものの抽象化を強めているような印象を与えていることである。八句めでは、狂ひ（狂ふの連用形）、光るが動詞、白しは形容詞であり、静塔としては珍しく用言が三語も用いられている。また、挙げられた十句中三句は体言止めである。三鬼の俳句と比較するに、静塔の俳句は体言型であり、抽象的で概念的である印象は強い。

#### 6. 考察

ア、三鬼俳句の文体上の特徴

波多野によれば、体言型の文章は抽象的で概念的であり、静的であり、「事物をわからせようとするよりも読者が事物の中へとび込むことを要求する。言葉は暗示の手だすけに止まり、そのこまごまとした説明は読者の想像に委せられる」とされている。小説作家言えば、志賀直哉の文体は体言型であるとされる。それに反して、用言型の文章は具体的に感覚的であり、動的情動的で読者に環境（文章の内容、文章で扱う対象物）をできるだけ詳しく説明するため文が長くなる傾向がある。別の言い方をすれば作者の意向や意志を押し付ける文章になりやすい、すなわち説明過剰になりやすいということである。谷崎潤一郎の小説の文体はこのタイプに属するという。

三鬼の少なくとも「診療俳句」では波多野説によれば用言型の俳句を好んで詠んでいるようであり、三鬼には具体的に感覚的な表現を好む傾向があると言える。このことは品詞の分析と統計学的処理によっても明らかである。また、三鬼の俳句そのものの形態学的特徴でもあった。その一方、静塔の「診療俳句」は体言である名詞の形が大型（巨大）であり、用言の使用が体言に比較すると少ない傾向があり、使用した用言があまり目立たない。静塔は体言型、言い換えると抽象的で概念的な表現傾向を示していると言える。

また、三鬼は説明過剰の傾向を示すために一物ものの俳句を詠む傾向があるが、静塔は説明をなるべく省く傾向があり、俳句の字数に余裕が生じることも理由の一つであるとも考えられが、二物衝撃型俳句、換言すれば取り合わせ俳句を詠む傾向を示すようである。

以上、体言と用言を中心に統計学的解析と検討を行い、その結果についての大略を述べた。三鬼の俳句については文体的に特異であると多くの人が指摘しているところである。まず第一に彼の俳句が所謂口語を用いた俳句であることを指摘しなければならぬであろう。しかし、このことはすでに多くの人に論じられているし、本論文の主旨はべつにあるので、ここでは触れない。次に、彼の俳句には動詞が多いと指摘している人がいるものの、三鬼俳句の個々についての印象をもとに述べているにとどまっていた。本研究では統計学的処理を行い、彼の俳句文体が用言型であることを明らかにすることができた。

副詞が多いのも三鬼俳句の特徴のひとつである。副詞の多くが声喩表現であることも、特異であると思われる。これらについても静塔俳句との数値的比較で明らかにされた。用言型の文体をもつて具体的な感覚的な文章を好んで書く人には副詞および声喩表現が多いことも波多野が指摘しているところである。

## イ、具体的感覚的な俳句

坪内稔典はある座談会<sup>①</sup>の中で、動詞が隠れた名詞の使用に言及している。それは例えば与謝蕪村の俳句「菜の花や月は東に日は西に」を取りあげて、この俳句には動詞が一つだにない。しかし動詞が隠れているのであると言うのである。「月は東に」は月は東に昇るの意味であり、昇るという動詞が隠れているのである。同様に、「日は西に」は沈むという動詞が隠れていることになる。かくて、動詞が隠れることが頻繁に起こりうるので、俳句を読むときには、隠れた動詞を読む必要があるだろうと述べている。平畑静塔の「狂院に身は宿直にて大文字」を読むときには、「私は狂院（精神科病院のこと）の宿直であるから、狂院を離れることができない。ちょうど今夜は京都を挙げて大文字焼きで大騒ぎをしているのに」と読み解くところであろう。すなわち読者は、私は狂院に居る、宿直である、今頃大文字焼きの最中である……と、動詞等を補ってこの句を読む必要がある。ここで、波多野の論に従えば、静塔は必要最小限の体言を使って読者にこの俳句を読者に差出したのである。差出したあとは読者の読みに任せてしまうのが体言型の文章を書く作者自身の気質なのである。かくして体言型文体の俳句作品は抽象化された概念的な世界を表現することになるし、抽象化を好む作者はかかる俳句を作ること

になる。

一方、三鬼ならどうであろうか。静塔の俳句「身は宿直にて大文字」のような省略文が三鬼に書けるだろうか。自分は宿直であるので狂院を抜けて出ることができないと書かなければ満足できないのである。この辺が用言型文章を好んで書く作者と体言型の作者の心理的な相違あるいは体質的な相違なのであろう。三鬼の代表句をあげれば、「三階へ青きワルツをさかのぼる」「白馬を少女に瀆れて降りけむ」「水枕ガバリと寒い海がある」が新興俳句時代の作品であり、「広島や卵食ふ時口開く」「中年や遠くみのれる夜の桃」「梅雨はげし百虫足殺せし女と寝る」「冬浜に老婆ちぢまりゆきて消ゆ」「びびびと死にゆく大蛾ジャズ起る」「秋の暮大魚の骨を海が引く」「木瓜の朱へ這いつつ寄れば家人泣く」などが戦後の俳句である。これらは品詞に分解して書き直してあるが、「秋の暮大魚の骨を海が引く」のような用言が一つのみの俳句もあるものの、なるほど三鬼の俳句に用言および副詞が多いことにあらためて感心する。さらに、ここにあげた俳句の大多数は用言止めである。用言型俳人と言える三鬼の戦前と戦後でほとんど変化はない。さらに換言すれば、三鬼の文章は具体的感覚的な文章を好んで書く俳句作家であり、



このことは生涯変化しなかったと言える。

#### ウ、新興俳句から根源俳句へ

太平洋戦争前のいわゆる「新興俳句」の美学を超えて、あるいは「新興俳句」の美学とは無関係に、戦後は生命主義の問題にまで突入し、いわゆる根源俳句の本質的部分を三鬼が演じた<sup>⑬</sup>と言われている。このことは三鬼俳句においては、物（俳句の素材）と自己（三鬼自身）の間に生じた真の無意味性の怖さを痛烈に感受したということのようである<sup>⑭</sup>。

では、以上述べた用言多用型の文体が「物と自己の間に生じた真の無意味性の怖さを痛烈に感受した」といわれる根源俳句の作成の原動力になりうるのであろうか。それは一つの重要な要素であることは否定できないまでも、それだけが根源俳句作成における原動力になるとは考えにくい。それは、あくまでも三鬼が自分の心の像（感情）を率直に詳しく俳句に詠んだ結果、読者の心象に強く響いた、読者の感動を呼んだのではないだろうか。そして三鬼が彼の心の像を俳句として具体的に正確に素直に詠むためにも、用言と副詞を多用する必然があったとは考えられないだろうか。

戦後、三鬼は山口誓子らと「天狼の会」を運営すること

になったが、多くの人によって山口誓子によって新興俳句時代の三鬼俳句の本質が衰えたといわれている<sup>⑮</sup>。確かにそういういた見方はあるだろう。しかし、それだけではない。もともと世界に広がるような俳句を好んで詠んでいた三鬼ではあるが、戦後は診療俳句のような内向きの俳句を詠むことが多くなった。しかし、それで彼の俳句が衰えたであろうか。「屋上にはばたきばたき医師貧し」や「病孤児の輪がぐるぐると天高し」などを読むとき、三鬼の言語と彼の俳句はやはりわれわれに向いてわれわれの心を揺さぶっていることに改めて気が付くのである。医療という行為が人の生命や健康を対象にしていることから、詠んだ俳句の小さな内容が巨大な時空へと拡散ないしは膨張性に無限に広がる性質を有するからでもある。しかし、このことは同時に、無へと収斂することを示唆するものであるとも言えよう。

#### エ、現代俳句に及ぼした三鬼の俳句

最近筆者は、現代の俳人の西川徹郎と安井浩司の俳句を論じているが、二人とも三鬼に比較してもあまり引けを取らないくらい用言とくに動詞を多用している。現代の俳人たちは用言を多用することによりあまり抵抗がないようである。嘗ては俳句に用いる用言は少ないほど良いとされてきたよ

うである。<sup>17)</sup> さすれば、三鬼のような俳句はこれまで出る幕さえなかったことになる。しかし三鬼は敢然とこの俳句界の常識に挑戦したと言つてよい。彼の挑戦が一定の成功をおさめたが故に、のちの世代、すなわち現代の俳句界があると言つて過言ではない。

さて、三鬼自身が感覚的俳句についてどのように言つていたかを示す論がある。<sup>18)</sup> それを少し紹介したい。彼がある論の中で、「俳句に現すものは、感覚の全てが実相に突入して、……（中略）……鋭敏な感覚が掴みえたものが新であり、真、美だからだ。」とまず書き出し、これに続けて「然し俳句の世界では、従来感覚という語を卑しめる傾向があつたと思う。これは一部の俳人が、感覚によつて得たものが感情になる前に、その道程の感覚だけを誇示し俳句に詠み込んだからである。……（中略）……俳句は感覚そのものを表現するのではなく、それによつて得た感情を表現するものである……（後略）」と述べる。ここで感覚という熟語と感情という熟語がセットになつて出てくる。感覚とは、外界からの一定の刺激を感じる働きと、それによつて起こる意識をいい、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚や、温覚・冷覚・痛覚などをつかさどる諸々の感覚器官によつてなにかの意識の変化がもたらされるのであるが、その変化した意識を指すのである。感情とは物事に感じて起

こる気持ち、外界の刺激の感覚や観念によつて引き起こされる、ある対象に対する態度や価値づけであつて快／不快好き／嫌い、恐怖、怒りなどを用いのである。すなわち我々の感覚器官が刺激された状態をそのままいうのではなく、その上に重層する美醜やよしあし、あるいはその相違などを感じとる心の働きを言い、そこには個人個人に備わつたセンス、感受性なども関連するようである。されば、我々がまず感覚器官などを通して感受した感覚を一度我々の心の中で消化あるいは分解などして、その感覚をせしめた対象に対する態度を表せしめることが感情であると理解されよう。さて、我々は日常的に感覚と感情とを分割乃至は分離して考えることは殆どない。我々が感覚器官を通して何かを感じ取ったとき、ほとんど瞬時に我々の心中に何らかの感情が起るのが普通である。しかしこれを文芸作品に仕立て上げるに当たり、感情の全てを作品にすることはできないのは理の当然であるから、感情のいくつかを取捨選択をしてからということになる。感覚ないしは感情をより詳しく正確に文章に仕立て上げるにあたつて、波多野の論に沿えば、用言型の副詞や声喩表現を汎用する文章にならざるを得ないことになる。そこでさらに三鬼は論を続けて、「ここで私は知恵のことを考える。一体知恵は俳句に何を与えるのであらう？ 感覚というものは本来知恵

に關係がないから、知的感覺というものは有り得ない。従つて美、真を掴み出すものは知恵ではない。知恵は、既に感覺が捕えた美、真が感情に移行する時始めて働きかけてくるものだ。叡智が感情に働きかけて来たものが知的感情だ。知性と感性との結合というものもこれを指すのである。」と、感覺にしる感情にしる作品に表現するときには知的な何かが必要であることを。

しかしそれだけではない。彼の俳句が我々の生命の根源の何か(恐らく無限の大きさであり同時に無であるもの)を刺激しないしは暗示しているからとはいえないだろうか。

彼の「診療俳句」が彼の根源俳句の原点に立っているとは言わないまでも、その近辺を占めていることには違いがないのである。また、そのことを表現するためには少なくとも研ぎ澄まされた三鬼の言語感覺<sup>19</sup>にとっては、かかる用言型の言語の形態と文体が必要とされたものではなかったか。戦前は三鬼の俳句が言語感覺の抜き出た鬼才と称されたが、その面影は戦後詠まれた「診療俳句」にも生きていたことは本研究からも明らかである。

それはともかく、戦後はいわゆる新興俳句の美学から一転して、根源俳句の中核的な位置を占め、生命の根源を見つめた俳人の祖とされている意味が所謂「診療俳句」からも出発していることを知るべきであろう。西東三鬼の物と

自己の間に生じた真の無意味性の怖さを感じたの若い俳人が現存すること、三鬼の死後五十年経た今でも、この問題は未だに十分論じつくされたとは言えないということをよく認識する必要がある<sup>20</sup>。

## 7. 結語に替えて

今回の検索によつて、三鬼が詠んだ俳句のうち、所謂「診療俳句」を抽出し、これらについて、品詞レベルの要素に分解しその特徴を述べるとすれば、三鬼の「診療俳句」は少なくとも静塔のそれに比較して用言型の文体を採っていることが明らかにされた。このことから、三鬼の「診療俳句」は波多野の言う「具体的感覺的」な文体を有する俳句に属するものではないかと思われた。

今後は三鬼の「診療俳句」以外の多くの俳句をも取りあげて、いわゆる「根源俳句」との関わりの上で、この実証作業をより深める必要があると考えられる。

## 注

- (1) 北野元生「西東三鬼の診療俳句―屋上にはばたきはばたき 医師貧し」『船団』九十三号、二〇一二年六月。戦前より中断していた歯科医業に戦後になって復帰した経過と、そこで詠んだ三鬼の「診療俳句」についての概要が論じられている。
- (2) 波多野完治『文章心理学入門』(新版、小学館、一九八八

年一二月第一版第一刷、一九八九年九月第二刷。

- (3) 波多野完治『文章心理学』(波多野完治全集1)、小学館、一九九〇年七月、第一版第一刷。

- (4) 西東三鬼「美と悲哀の俳句―窓秋作品「思慕」批判」、『俳句人』一九四七年五月号、真文芸社刊。言語表現に関する三鬼の造詣の深さがよく表現されている論である。

- (5) 西東三鬼『西東三鬼全句集』(監修・平畑静塔、三谷昭、編集・三橋敏雄、鈴木六林男、大高弘達)、都市出版社、一九六一年二月、初版。

- (6) 平畑静塔『平畑静塔全句集』(編集・中田亮)、沖積舎、一九九八年十一月、限定五〇〇部。

- (7) 枝元一三「誓子考」、『学大国文』五号、一九六二年。山口誓子の俳句を、波多野完治の文章心理学的分析法に添って、より詳しく数値的に分析を行って作成された論文である。その手法は本論文に当たり大いなるヒントを提供したものである。

- (8) 田中みどり『日本語のなりたち―歴史と構造』、ミネルヴァ書房、二〇〇三年。日本語の単語単語の成り立ちについての考察は極めて精緻で興味深い。

- (9) 沢木欣一、鈴木六林男『新訂俳句シリーズ人と作品13 西東三鬼』一九七九年、桜楓社。本書のなかで、とくに鈴木六林男に三鬼の動詞に関する論述がある。

- (10) 金田一秀穂、森山卓郎、塩見恵介、坪内稔典「座談会記録・俳句と動詞」、『船団』九十二号、二〇一二年三月。本座談会では現代俳句の中での動詞のあり様が論じられている。この中で、西東三鬼の俳句が取り上げられ、三鬼の動詞の使用頻度についての言及がある。

- (11) 注(10)に同じ。座談会の中の坪内稔典の発言を抜粋した。

- (12) 安井浩司「西東三鬼論」、『俳句評論』一九六九年九月号初出。のち単行本『もどき招魂』端溪社、一九七四年十月に「さまよう鬼―西東三鬼ノート」と改題して所収。

- (13) 安井浩司「戦後俳句考」：「戦後派の功罪」、『俳句研究』一九八三年五月。数多の戦後俳人が取り上げられているが、中でも三鬼についての論述は極めて秀逸である。

- (14) 注(9)に同じ。

- (15) 三谷昭「西東三鬼の人と作品」、『西東三鬼全句集』都市出版社に「解説」として所収。戦後三鬼が山口誓子に兄事するに至った経過が詳しく述べられている。戦後の三鬼俳句を考える場合、この三谷の論は極めて重要である。

- (16) 北野元生『書翰』西川徹郎句を読んでみる(一)、(二)、(三)、『TOTUS』二十一、二十二、二十三号、二〇一一年十二月〜二〇一二年十月。西川徹郎『無灯艦隊』の文体について分析を行い、さらに安井浩司『青年経』との比較を行い、使用単語とくに体言と用言の使用頻度について言及している。

- (17) 注(10)に同じ。座談会の中の坪内稔典の発言を要約した。

- (18) 注(2)に同じ。

- (19) 平畑静塔「ポケット三鬼論」、『西東三鬼全句集』都市出版社に「解説」として所収。三鬼の語感についての感想が述べられている。

- (20) 注(13)に同じ。

表1 西東三鬼の「診療俳句」七十九句・一覧

『西東三鬼全句集』 平畑静塔・三谷昭監修（編集・三橋敏男、鈴木六林男、大高弘達）都市出版社、一九七一年二月発行初版より（初出句と発表年度を示し、全句集で形の異なるものは、その句のあとに『全集』と断わって付記した）。

『今日』所収分

柩車ならず枯野を進むわが移転（一九四九年、天狼2、3合併号）

〔『全集』・車ならず枯野を行くはわが移転〕

枯野過ぐ貧しき移転にも日洩れ（同）〔『全集』・枯野行く貧しき移転にも日洩れ〕

枯野の木人の歯を抜くわが能事（同）

悴みて貧しき人の義歯作る（同）〔『全集』・かじみて貧しき人の義歯作る〕

水の月公病院の煙照らす（同）

枝鳴らす枯木の家へ帰れば寝る（同）〔『全集』・枝鳴らす枯木の家に倒れ寝る〕

いつまでも冬母子病棟の硝子鳴り（一九四九年、天狼5）

屋上に草も木もなし病者と蝶（同）

新樹に鴉手術室より血が流れ（一九四九年、天狼6）

女医の恋梅雨の太陽見えず落つ（一九四九年、天狼7、8合併号）

小児科の窓の蜂の巣蜂赤し（一九四九年、天狼10）

饅頭を夜霧がぬらす孤児の通夜（一九四九年、天狼12）〔『全集』・饅頭を夜霧が濡らす孤児の通夜〕（注・本句は分析対象にせず）

大枯野壁なす前に歯をうがつ（一九四九年、雷光12）

女医の手に抜かれし臓腑湯気を立つ（同）

死後も貧し人なき通夜の柿とがる（同）

孤児孤老わらひ止らず柿の種（同）〔『全集』・孤児孤老手を打ち遊

ぶ柿の種

種痘かゆし枯木に赤きもの乾され（一九五〇年、天狼1）〔『全集』・種痘かゆし枯木に赤きもの干され〕

屋上にはばたきばたき医師貧し（一九五〇年、雷光2）〔『全集』・屋上に双手はばたき医師寒し〕

鯨嚙んで始まる孤児と医師の野球（同）〔『全集』・鯨食つて始まる孤児と医師の野球〕

コンクリートの女医の私室に飴赤し（同）〔『全集』・飴赤しコンクリートの女医私室〕

夜の雪ひとの愛人くちすずぐ（一九五〇年、天狼3）

年新し狂院鉄の門ひらき（同）

寒の狂院両眼黒く窓々に（一九五〇年、天狼4）

人を焼く薪どさどさ地に落す（同）

病者起ち冬が汚せる硝子拭く（一九五〇年、天狼5）

病者の手窓より出でて春日受く（同）

わらわらと日暮れの病者桜満つ（同）

病廊にわれを呼び止め妊み猫（同）

病廊を蜜柑馳けくる孤児馳けくる（同）

狂院の向日葵の種握りしめ（一九五〇年、雷光6）

種痘のメス看護婦を刺し医師を刺す（同）

診療着干せば囀る麦の秋（同）

汗すべる黒衣聖母の歯をうがち（一九五〇年、天狼9）〔『全集』・汗すべる黒衣聖母の歯うがてば〕

無花果をむくや病者の相對し（一九五〇年、天狼10）

秋来たれ病院出づる肥車（同）

病孤児の輪がぐるぐると天高し（一九五〇年、天狼12）

木犀一枝暗き病廊通るなり（同）

聖母より抜き取りし歯の乾きたり（一九五〇年、雷光12）〔『全

集』・聖姉妹（マメールのルビ）より抜き取りし歯の乾きたり）

わが悪しき犬なり女医の股齧めり（同）

屋上を煤かけめぐる医師の冬（一九五一年、天狼1）

血に染む手洗へば朝の桜幽か（一九五一年、天狼5）（『全集』・血ぬれし手洗ふや朝の桜幽か）

### 『変身』所収分

病院の奥へ氷塊引きずり込む（一九五一年、天狼10）

寒の中コンクリートの中医師走る（一九五二年、天狼3）

病者等に雀みのらし四月の木（一九五二年、天狼4）

いつまで何を指さす病者春夕べ（一九五二年、天狼4）

夏はじまる原色べたと病者の画（一九五二年、断崖6）

波うつ麦垣穂に病者伸びあがる（一九五二年、断崖7）

職場へ行く枯同日葵を火となして（一九五二年、断崖11）

病室の床に光りて蟻動く（同）

柿転ぶコンクリートの中死ぬまで病む（一九五二年、天狼12）

冬の蜂病舎の硝子抜けがたし（一九五二年、断崖12）

孤児の癒え近しどんぐり踏みつぶし（一九五三年、断崖1）

共に寒き狂者非狂者手をつなぐ（一九五三年、天狼1）

病室に置く新しき金魚と水（一九五三年、断崖5）（『全集』・病舎へ捧げゆく新しき金魚と水（断崖6））

桜冷え白衣を脱ぎて看護婦病む（一九五四年、俳句6）（『全集』・

桜冷え看護婦白衣脱ぎて病む（天狼6））

土団子病孤児の冬永かりし（一九五四年、天狼6）

剝製の雉子狂院の秋やすらか（一九五四年、天狼11）

百の貧患者に寒のぼろ太陽（一九五五年、天狼2）

極寒の病者の口をのぞき込む（一九五五年、断崖3）

病院の岩窪の霰夜光る（一九五五年、天狼4）

貧しき退院胸に霰をはじつつ（同）

桜ごし赤屋根ごしに屍者の扉（一九五五年、天狼6）

『全集』に「補遺」としてまとめられている。

腐れし歯あまたを抜きて枯野帰る（一九四九年、雷光2）

寒き手や人の歯を抜き字を書かず（同）

患者みな貧し千羽の紙の鶴（同）

病廊を鼠逃るる老婆の死（同）

嬰兒の死白衣を脱ぎて女医帰る（同）

浴槽をめつむるあまた歯を抜き来て（一九五〇年、雷光2）

病院の春雨鯨肉（くじら）噛み悩み（一九五四年、俳句6）

廻診終りたり秋の蚊を吹き払ひ（一九五五年、俳句1）

火を焚きて病院裏の土焦がす（同）

つぎはぎの診療着園枯るゝ中（同）

以下は、鈴木六林男編「西東三鬼全句集拾遺」（『季刊俳句』第二号、

一九七四年、中央書院）（鈴木六林男選『西東三鬼集』（現代俳句の世

界9）、朝日文庫、一九八四年、朝日新聞社に収録）に収録された九

十三句のなかの「診療俳句」に該当するものは次の七句である。すべ

て、初出誌は不明である。今回の分析対象から除いた。

病者等が指さし春の川光る

蟻生まれ貧の病者のてのひらに

菜の花遠し貧者に抜きし歯を返す

どん底の患者の血もてわが手染まる

看護婦の水虫かなし春の雲

血に染む手硝子の外の朝桜

朝桜病者に生まれ来て貧し



表2 平畑静塔の診療俳句百二十三句の一覧

中田亮編集『平畑静塔全句集』沖積舎、一九九八年十一月発行  
(限定五百部) より

以下は太平洋戦争開戦以前の句

灯せる実験室や五月雨(一九二七年、馬酔木)

そのころの解剖(ふわけ)の画帳曝しあり(一九二七年、馬酔木)

痴愚の女は医師になつて種をまく(一九三三年、馬酔木)

狂院に身は宿直にて大文字(同年、馬酔木、京大俳句、月下の俘虜

所収)

解剖を了へし学徒に帰り花(一九三三年、馬酔木、京大俳句)

年札やまろ寝の狂者診てしより(同年、馬酔木、京大俳句)

狂院は罌粟の燃えある園ひろく(同年、馬酔木)

なつきたる狂者と医師と菊根分(同年、馬酔木)

狂院へ出水の橋をけふも渡り(同年、馬酔木)

大文字や白衣の狂者庭に立つ(同年、馬酔木、京大俳句(立ち)

秋風や狂者の望む季寄せかふ(一九三三年、京大俳句)

顕微鏡温室(むろ)のさくらを押す卓の(同年、京大俳句)

相寄れる狂者の貌や大文字(同年、京大俳句)

狂者らに大文字の火は須臾なりき(同年、京大俳句)

大文字視たる狂者を又鎖す(同年、京大俳句)

尿の色比ぶと雪の庭に來ぬ(一九三四年、京大俳句)

尿(しと)の色比するに雪の夕明かり(同年、京大俳句)

雪だるま狂院の扉は総玻璃に(同年、京大俳句)

狂院の青きふみつつ老教授(同年、京大俳句)

病囚に庭の水打つ模範囚(同年、京大俳句)

はるかなる拘禁房も花の中(同年、京大俳句、月下の俘虜所収)

教へ子ら腑分けをぞしぬ寒腑分(一九三五、京大俳句)

遊歩する患者は秋の飢知らぬ(同年、京大俳句)

土のごと痴れゆく者に澄む秋日(同年、京大俳句)

一片の医師われ秋の屋上に(同年、京大俳句)

雪をゆくまとへる白衣死布かと(同年、京大俳句)

医師が割く赤青の腑を花と見き(同年、京大俳句)

雪は玻璃麻薬ひそかに身に注せば(同年、京大俳句)

驅梅葉少女に注すと日は蝕えし(同年、京大俳句)(月下の俘虜所

収)

ギター弾く樹下狂人に日は蝕えし(同年、京大俳句)(月下の俘虜

所収)

医師の靴白し山脈俯て遠し(同年、京大俳句)

苔赤き悲しき谷へと医のふたり(同年、京大俳句)

蟬擲てば狂人守の夜がつかれ(一九三七年、京大俳句)

すゞしげに検微院へ手をつなぎ(同年、京大俳句)

建国祭七人の医師肥え太り(同年、京大俳句)(月下の俘虜所収)

大いなる医書と狂人山に充つ(同年、京大俳句)

師よこれは呆けし弟子の寒影法師(同年、京大俳句)

岳麓にクルスをひめし軍医の死(同年、京大俳句)

狂院の軍歌へ看護兵還る(一九四〇年、京大俳句)

以下終戦後(「天狼時代」)

軍医の手なつやはらかに今や徒手(一九四七年、現代俳句)(月下

の俘虜所収)

四温の日あまねき国に医書残す(同)

盆の夜や踊りて癪が地にぎつしり(同)

癪の手が夜天つかまむとする踊(同)

癪が踊り夜の崖肌生々し(同)

手を振れば癪の踊りは走る構へ(同)

壮漢の癩の踊を心に彫る(同)

我を遂に癩の踊の輪に投ず(同)

踊りつつ癩尺寸に人臭し(同)

(踊りつつ癩は咫尺に人くさし(同年、天狼))

主ならねど癩と踊りて我汗す(同年、天狼)(月下の俘虜所収)

青蚊帳に癩と踊りし女身入り(同)

美少女が癩と踊りし短夜寝ず(同)

ギター弾く樹下狂人に日は蝕(は えし(同))

痴呆合唱洩れて石階登る女(同)

病院船礁赫色に故国なり(同)

虫聴くか分裂病の仰臥して(一九四八年、天狼)

癩とゆく内海の潮に手を冷し(一九四八年、一九五三年、天狼時

代)(『月下の俘虜』所収)

夜光虫舟の癩人寸語なし(同)

癩院の青蚊帳の夜は切なけれ(同)

寄らむとし外寝あらはの癩との距離(同)

癩院の黒き塩田乾くまま(同)

癩学を天は賜ひて夕焼す(同)

癩童子なりや夏樹に顔隠す(同)

ああ遠く夏山の癩跳躍す(同)

無花果を食ふ天刑の名をうけて(同)《天刑Ⅱハンセン氏病のこと》

癩家族炎昼に眼をひらき住む(同)

浪乗りの癩児左右にわが女医は(同)

八重桜狂人館より唾とんで(同)

春昼や腑分して来したゞの顔(同)

狂ひても母乳は白し蜂光る(同)

手毬の子消えて脳病院の塀(同)

足くさるまで正月を医師読みたし(同)

狂院の蟬の樹下わが塚めきて(同)

看護婦が裸女縛し居る毛虫の昼(同)

狂ひの寝のまつ毛合わすや青葉木菟(同)

ただ立てり狂ひて立てりセルを包む(同)

糊硬き白衣の裾を蜥蜴去る(同)

狂院の白き礫や蟬の樹へ(同)

金銭の往診なすや熱砂踏み(同)

良医ならず金銀の蠅拌み打つ(同)

狂院の塀が自若と運動会(同)

芝火(しばびⅡ野焼き)立ちても狂院にまぎれなし(同)

欲すれば芝火狂女の裾にまはる(同)

狂院の高き旗竿雪を待つ(同)

狂女より毬がながれて水草生ふ(同)

白藤や狂人守の嘘をつき(同)

五月惜しむ脳病院の菓子を喰ひ(同)

土一片に脳病院の大気澄む(同)

万凍るカトリック医師来るまで(同)

病院の細粒の豆つかみ打つ(同)

雛立てて脳病院に住ひせり(同)

蝙蝠をはき出す悪しき狂院は(同)

青ざくろ万病医者に明るけれ(同)

切り株が狂女の座椅子大気澄む(同)

毛糸玉廻る狂女の膝の谷(同)

身を落とし狂者守する花八ツ手(同)

暖爐守る狂人守の強面に(同)

向日葵も空も大きな狂者守(同)

狂院の旗や野分の啾々裡(同)

以下は関東時代

夏草中山羊の目があり新任す（一九五四年、句集『旅鶴』）

草分の仕事蚊火立て目をつむる（同）

炎昼の辞める手擦りに歯科チエア（一九五六年、同句集）

十月蛙鳴いて始まる患者会（一九五八年、同句集）

雛の間に押しかけ精神鑑定医（一九五九年、同句集）

精神科運動会天あけひろげ（一九六〇年、同句集）

ねんねこの顔でるおどろなる病室（同）

本造病院の長台風にころぶ（一九六一年、新編・朽木集）

足袋白し「一日看護婦」立ち居てよ（一九六二年、同句集）

看護婦は春蚊捕へて血を見せず（同）

綿虫やムンテラ医師のだまるとき（同）

（一九六三年～一九八四年、診療句なし）

ハンセン氏病の島より年賀來し（一九八五年、句集『竹柏』）

精神科広間に聖樹常夜燈（一九八六年、同句集）

加はらず狂女の踊見る阿呆（一九八七年、同句集）

正気にて狂女よつびてでも踊る（同）

老狂女百まで踊り生きむとす（一九八九年、同句集）

精神科切りまで美声にて踊る（同）

精神科踊りて要らず眠り薬（同）

精神科踊ればどん底には非ず（同）

院長の掛声精神科は踊る（同）

踊りたる狂女と生きし二十年（同）

抱かめとよりそうふ精神科の聖樹（一九九〇年、同句集）

表裏なくかがやく精神科の聖樹（同）

立ち通す聖樹が精神科のすくひ（同）

日が上るまで精神科の盲聖樹（同）

精神科聖樹に語るにも独語（同）

見ごろにて花ぐもり精神科ひるね（一九九一年、同句集）